

「ような」の介在する名詞修飾表現「XようなY」について

高 橋 美奈子

節による名詞修飾表現で「ような」が介在する「XようなY」という表現を観察し、その意味・用法の分類を行った。比況・印象・概要・例示・目的がそれである。例示については、修飾節の内容や文脈との関係から、さらに三種類を区別した。

0. はじめに

名詞修飾表現（連体修飾表現）の中に、「ような」が介在するもの、すなわち、「名詞＋の＋ような」あるいは「節＋ような」という成分が名詞を修飾している表現がある。本稿は、節による名詞修飾表現の記述的研究の一環として、「節＋ような」を修飾成分に持つ名詞修飾表現－以下、「XようなY」と呼ぶ－について、その意味・用法の分類をこころみるものである。

以下、1. で主要な先行研究に触れ、2. で前提となる名詞修飾表現の分類について示し、3. 以降で「XようなY」の意味・用法の分類を示す。

1. 先行研究

モダリティ形式として用いられる助動詞「ようだ」についての研究や、従属節を形成する「ように」についての研究は数多いが、ここでは「XようなY」という名詞修飾表現の意味・用法に関する主要な研究を概観する。

1-1 森山卓郎 (1995)

森山(1995)では、「ようだ」「ように」「ような」を扱っている。ただし、その考察対象は「よう」「みたい」が相互に置換できる場合に限定されている。名詞修飾表現（「AようなB」と呼ばれる）については、「ような」の前後の二つの項A・Bの関係が包含的・不一致・不明のいずれかという観点から分析を行っている。「不明関係」が「推量」、「不一致関係」が「比喩比況」、「包含関係」が「例示」となる。概略、次のようにまとめられる。（例は森山1995より、Aが節のものを中心に引用する。文の中に現れている名詞修飾表現には下線を施す。）

・不明関係－推量：「特定の状況を観察して、話し手の判断内容をそれに類似したものとして述べる用法」（p.503）とされる。連体形の不明関係（推量）用法は、「「判断のもととなる状況」と「観察によって判断する内容」との「類似性」としてとらえることができる」（p.500）ともある。

（例）そこにむしり取られたような着物の切れ端が落ちているのを見た。

これには次の二つの条件が必要となる。

- ①被修飾名詞は「判断根拠としての事物」でなければならない。
- ②特定の時空において「観察」されたという文脈、具体的には、「…がでてきた／…が見えた／…があった／…がいた」のような文脈が必要である。

・不一致関係－比喻比況：「本来別者である二者が属性の一致によって類似するとして対照される関係」(p.504)とされる。ある事物(B)の属性を表すために別の事物(A)の属性との「類似性」をいう用法である、と言える。

(例) ばらのようなぼたん、ばらのような花びらのぼたん

(例) [実際はばらではないと知っていて] ばらのような花だね。この花は。

・包含関係－例示：「包含関係ということを逆から言えば、例を示すということであり、「ような」によって、類似する例が表されるという、例示関係を構成する」(p.515)とある。次のような場合があるとされる。

①「A(の)ようなB」で、「B」が「A」の上位概念で「A」に類似するものを取り出す場合

(例) 助手のようなポストがもっと必要だ。(「助手」は「ポスト」の下位の一例)

(例) ふだん使わないような珍しい言葉 (「ような」節が属性を表している)

(例) 教師を「殴るような/殴ったような」学生は退学だ。(同上)

(例) 田中君が言ったような意見(集合を指示する。「田中君が言った意見」ではなく、それに類似する「意見」が取り上げられている。すなわち、個別の「意見」そのものでなく、その属性的側面だけが取り上げられている)

②「A」を例とする内容を表す名詞が「B」にくる場合(内容概念が被修飾部にくる場合)

(例) 授業中にビールを飲むような態度(具体例を「ような」で示すことで、その「態度」を一般的な問題として取り上げ、事態の属性を強調する)

(例) 記載事項に変更が起こったような場合

「ような」の前後二項の関係を不明・不一致・包含的に分類した上での「推量」「比喻比況」「例示」という三分類は非常に明快である。しかし、森山(1995)では言及のないような「XようなY」についても、本稿では取り上げて分類の中に位置づける¹⁾。

1-2 安田芳子(1996)(1997)

安田(1996)は、「AようなB」の意味用法を、Aが示す事柄の事実性「リアリティー²⁾」の違いに基づき〈様態〉・〈比喻〉・〈内容の名付け〉に分類している。概略、次のようにまとめられる。(例は安田1996より引用し、例文中の名詞修飾表現に下線を施す。)

〈様態〉：「Bの様態はAが示す事柄かどうか未確定であるが類似しているとして、AはBを修飾する」(p.66)とされる。「Bの様態をより詳しく説明するために「Aような」というヨウナ節がくる」(p.68)ともある。

(例) うちの家族にはハイヒールを履くような女はいない。(内の関係³⁾)

(例) それまでの笑顔が消えて、探るような眼つきになった。(外の関係)

〈比喻〉：「Aが示す反事実の事柄によってBをたとえる」(p.66)とされる。

(例) まるで16世紀の貴族が着ていたような服ですね。(内の関係)

(例) くらげに刺されて、まるで鉄条網でひっかいたような傷になった。(外の関係)

〈内容の名付け〉：「Aの述部には主に言語活動を伴う動詞がきて、その内容は即ちBであると名付けられることを示す」(p.66)とされる。「Aには事実的な事柄がくるのだが、その述部には言語活動を伴う動詞が来る場合が多く、その言語活動の結果生じる内容は即ちBであることが示される」(p.75)とも説明されている。

(例) ロイが語ったような日系人は少ないらしい。(内の関係)

(例) 高齢化社会が確実に進んでいるような現実を真剣に考えるべきだ。(外の関係)

そして、上記の三用法とは別に〈例示〉用法がある。安田(1997)では、「AようなB」において「ような」が〈例示〉の意味を表す時に共通に持つ意味的、文法的な特徴として、次の2点が指摘されている。

・AがBの外延であるという包摂関係が成り立っている

(例) 都会には泥棒やスリのような軽犯罪が多い。

・連体修飾「Aのような」は被修飾名詞「B」に対して非限定用法になっている場合が多い

(例) 花子のようなかわいくて気のきいた女の子が好きだ。

〈例示〉用法は前述の三用法と並列するものではなく、環境が整ったときに、それぞれに現れ得るとされる。例えば次のような例がそれに当たるという。

(例) 道を歩いていたら拳銃を発射するような鋭い破裂音が聞こえた。

…〈様態〉用法であると同時に〈例示〉の意味が現れている

(例) 彼の家はまるで貴族が住んでいたかのような立派な石造りの家だ。

…〈比喩〉用法であると同時に〈例示〉の意味も持つ

(例) 一分の遅刻も欠席と見なす(という)ような学生に対する厳しい規則が学生を苦しめている。…〈内容の名付け〉であると同時に〈例示〉の意味も持つ

〈比喩〉についてはとくに異論はない。〈様態〉については、安田が指摘するように、被修飾名詞に「表情」「顔」「態度」「口調」「声」「調子」といった名詞がくる場合、それらを話し手が外側から観察して推測したところの、動作主体の感情や行動意図が修飾節に示されている、と見なすことには首肯できる。しかし「ハイヒールを履くような女」のような表現をも〈様態〉に含めることには疑問が残る。また、〈内容の名づけ〉に関しては、Aのレアリティーの点では確かに〈比喩〉や〈様態〉とは別種のものであるが、「Aの言語活動の結果生じる内容がBである」という説明には疑問が残る。

2. 名詞修飾表現の分類

次節3.以降で本稿における「XようなY」という名詞修飾表現の意味・用法の分類を示すが、その前に、本稿での、名詞修飾表現の構造分類について示しておく。

本稿では、修飾節と主名詞との関係のあり方からの分類に関しては、寺村(1975)などで示されている「内の関係」・「外の関係」という二分法は採らず、次のような二分法を用いる⁴⁾。

(1) a. 「内容補充による修飾」

主名詞となるのは、一定の内容を持つような名詞である。

修飾節は、主名詞の指すものの内容を表している。

b. 「関連事態による修飾」

修飾節が、主名詞が指すものが関わる事態を提示する。

主名詞が指すものは、修飾節の表す事態に何らかの形で位置づけられる。

それぞれの下位類には次のようなものがある。

(2) 内容補充による修飾の下位類

- ・ 言語表現、思考、認識、心情の名詞を主名詞とするもの

～という / との {発言、記述、発表、考え、想像、予想、意見、喜び、悲しみ …}

(例) 首相は指導力に欠けるという発言、この新人が優勝するという予想

- ・ 事柄を表す名詞を主名詞とするもの

～ (という) {出来事、事件、状態、場合、…}

(例) 食品に毒物が混入される (という) 事件、景気が悪化している状態

- ・ 事態を視覚的に表す名詞を主名詞とするもの

～ (という) {光景、有様、写真、絵 …}

(例) 子どもたちが仲良く遊んでいる (という) 光景、事故現場に人々が倒れている写真

(3) 関連事態による修飾の下位類

① 修飾節の事態を構成する成分を主名詞とするもの⁵⁾

(例) 魚を焼く男、私が買った本、私が生まれた年、姉が結婚した相手、安閑としていられる情勢、いろんなことを考えてしまう映画 など

② 修飾節の事態に付随するものを主名詞とするもの

- a. 主名詞が指すものが、修飾節の事態に由来するものである表現

(例) 魚を焼く匂い、鎖のぶつかる音、タイヤがスリップした跡、殴られた痛み、友を失った悲しみ、奴隷を売った金、映画を観た感想、努力した結果 など

- b. 主名詞が指すものが、修飾節の事態の成立・実現に関わるものである表現

(例) 自分の個性を見つける助け、宝石を現金に換える手伝い、制作に没頭できる条件、眠りに入る妨げ、バスルームを使う邪魔 など

- c. 主名詞が指すものが、事態に潜在的に備わっているものである表現

(例) レポートを書く過程、脳ドックを受診する意味、映画を観た回数 など

③ 何らかの省略を経ているもの

- a. 主名詞が、相対的な時点を表す名詞である表現

(例) 革命が本格化する前、死刑を執行した後 など

- b. 主名詞が、相対的な位置を表す名詞である表現

(例) 豚をさばいている横、マンモスの頭や脚が見つかった周り など

- c. 主名詞が、ある複数のものの一部、数量や分量の合計や全部、数量や分量の倍数を表す名詞である表現

(例) 事件を目撃した一人、賄賂として渡された総額、厚労省で認められている5倍 (の

量のダイオキシン) など

上記の類型すべてにおいて「XようなY」の各意味用法が現れるわけではない。用法によっては、特定の類型と結びつくものもある。以下、各用法について、類型との関係も交えて述べていく。

3. 比況

従来、比喩あるいは比況と呼ばれる「XようなY」の意味用法を、ここでは比況と呼ぶ。「X(名詞)のようなY」の場合、Yを説明するのに、Yと共通の属性を備えているが、別のものであるXを提示する。Xが節である「XようなY」の比況用法では、Xが示すのは現実ならざる事態、事実ではない事態である。

[内容補充による修飾]

修飾節Xは主名詞Yの表すものの内容を説明するが、Xが示すのは現実ならざる事態、事実ではない事態である。

- (4) これを見ていると、古い時代劇精神の亡霊が薄汚れた衣装をまとって現れて来たような
感じを受ける。 (双葉十三郎「日本映画批判」)
- (5) 放心したぼくの眼に、ふと、ピストルの銃口がうつった。はじめぼくは水道の蛇口をのぞきこんでいるような錯覚におちいった。(安部公房「R62号の発明・鉛の卵」)
- (6) [幼い息子のやんちゃぶりについて語る文章] 時たま深夜に帰宅すると、我が家は強盗にでも入られたかのような混乱状態になっていることがある。(若島正「殺しの時間」)

[関連事態による修飾]

修飾節Xは、Yが関わる、現実ならざる事態、事実ではない事態を示す。たとえば(7)の主名詞「遮光器土偶」は修飾節中の述語「かけた」の主体に当たるような格関係を、(8)の「華麗な色」は「染めた」の対象に当たるような格関係を持つ。しかしもちろん実際に土偶がメガネをかけていたり、鳥の色を絵具で染めたりしたわけではなく、Xは「遮光器土偶」や「華麗な色」の属性を説明するのに適したたとえとして示されているに過ぎない。

- (7) 大きなメガネをかけたような遮光器土偶 (朝日新聞)
- (8) [異国の鳥の描写] どちらも赤と青と黄の絵具で染めたような華麗な色をしています。
(山田風太郎「室町少年倶楽部」)

4. 印象

比況の場合、修飾節Xの示す事態は現実・事実ではないことが自明であるが、Xの示す事態が事実・現実であるかどうか不明・不確かな場合もある。そのような「XようなY」の意味用法を「印象」と呼んでおく。

[内容補充による修飾]

Yは主として「気」「感じ」「印象」「記憶」「予感」「不安」といった名詞である。XはYの内容を説明するものであるが、それが事実・現実であるかどうか、話し手や視点人物（小説の場合など）には不明・不確かな事態である⁶⁾。

(9) つらつら思うに、昔はもっとファッションと音楽というものが深くつながりあったような気がする。 (WEB 本の雑誌)

(10) [書評の一節] おしむらくは、後半部の暗殺の謎を追う過程が、従来の暗殺犯人説の瑕瑾を暴くためだけに描かれているような印象があつて興を削られることだろう。

(WEB 本の雑誌)

(11) [子どもの頃よく行った料理店について] 平土間で丸テーブルを囲んでいると、二階の赤い欄干の上で大きな蟹のハリボテが鉢をちょきちょきさせていたような記憶がある。でも、これは記憶違いで、上海蟹の丸揚げの印象が強烈だっただけのこともしれない。

(種村季弘「江戸東京《奇想》徘徊記」)

(12) 何とは知らず、それが恐るべき武器であり、恐るべき姿勢であるような予感にうたれ、内匠は…

(山田風太郎「忍法破倭兵状」)

[関連事態による修飾]

「船と衝突した傷」「3両目と衝突した跡」といった表現は、先に(3)②「修飾節の事態に付随するものを主名詞とするもの」に示した「a. 主名詞が指すものが、修飾節の事態に由来するものである表現」である。その種のものに「ような」が介在している表現がある。

(13) (鯨の体には) 船と衝突したような傷があった。 (朝日新聞)

(14) [ジェットコースターの事故の報道] 走行中に外れたコースター4両目結部。3両目と衝突したような跡も残る。 (朝日新聞)

修飾節Xと主名詞Yの間に「ような」が介在する(13)や(14)の場合、Yの「傷」や「跡」を手掛かりとして、それらを生じさせた事態として話し手が想定した事態を、Xとして示していると言うことができる。Xの内容はあくまで話し手がYから得た想定に過ぎず、Xが示す事態が実際に存在して主名詞Yが表すものを生じさせたかどうかは、話し手には不確か・不明である。

次も同様の例である。

(15) (遺体の) 首にひもで絞めたような傷が見つかったことから… (朝日新聞)

(16) 22日11時ごろ、付近の住民が拳銃を発砲したような音を聞いており (朝日新聞)

また、Yが、人間の「様子、態度、顔(表情)、仕草」といった類の名詞であるものもある。この場合のXは、Yを手掛かりに話し手が、Yを示す人の思惑、感情、意図、抱えている(背景にある)事情などについて想像した事態を表す。それが事実かどうかは不確か・不明で、あくまで話し手なり視点人物なりの持った・受けた印象である、と見なして「印象」に含める。

(17) 川根は(…) そっとお札を返したが、いかにも目の前に近づいたタタリを怖れているような様子だった。 (「坂口安吾全集」12)

(18) 才次郎に別に女がいるような様子もなかった。 (「松本清張全集」17)

(19) [映画の1シーンの描写] そこで車掌の方も納得したような顔をする。

(和田誠・三谷幸喜「それはまた別の話」)

(20) (彼女は) いくらかびっくりしたような表情を見せたが、(略)。(横溝正史「八つ墓村」)

(21) 田中さんはこの話を誰かに聞いてもらいたくってたまらないような風情で本当に嬉しそうであり、 (佐藤忠男「溝口健二の世界」)

以上は(3)②aの例で、Yとなる名詞に意味的特徴がある表現だが、そのほか、(3)①の、主名詞が表すものと修飾節中の述語との間に格関係が見出せるような名詞修飾表現の例もある。

(22) [厚生技官を名乗る男が銀行の支店を訪れ、近隣の家で赤痢が発生したのでこの建物も消毒する必要があると告げた。] しかし、渡辺支店長は、慎重だった。彼はこっそり小使いを、近くの平塚橋交番に行かせて問い合わせさせた。交番の巡査はこの訴えを聞いて、さっそく自転車で小山三丁目あたりを探し回ったが、赤痢が出たような家がない。

(「松本清張全集」17)

(23) そこでは、壁に凭れて元気なく考え込んでいる者もいるし、中年者の夫婦が子供を寝かせつけているのも見られる。総じて着ている物は垢にまみれ、風呂は何日も入っていないような手足をしていた。 (「松本清張全集」24)

5. 概要

これは、Xが内容補充節である「XようなY」のうちの、言語表現に関わる名詞をYとする名詞修飾表現に認められる。

主名詞Yが発話や記述などの言語表現に関わる名詞や、言語表現の持つ「意味」「趣旨」などといった名詞類の場合、その内容を説明する修飾節Xとの間に「ような」が介在することで、「おおよそ」「概略」「元の表現そのままの表現や、元の表現の正確な再現ではないが、こういう意味内容である」という意味が加わる。

(24) でも、市川橋と小松川橋の検問がうるさくて、検問に引っかけたら全部没収らしい。いくら水アメでも、原料の芋は統制品だからな。それで値段が割高になるような話だった。 (結城昌治「終着駅」)

(25) 店内には、たしか、「虎は死して皮を残し、織田作は死してまぶシカレーを残す」というような色紙があったように記憶する。 (嵐山光三郎「文人暴食」)

(26) (彼は) 持っていた紙袋にいきなり詩を書き始めた。ポール・ヴァレリーの作品。忍耐の時間を経て、収穫を待つというような意味だという。 (朝日新聞)

(27) 大阪府立大学名誉教授の故中尾佐助氏からうかがったお話では中尾氏自身フォーチュンと似たような方法をとっておられた。(略) 真のフィールドワーカーは無駄を省いてベッドで調査するものだ、というような趣旨だったと記憶している。

(白幡洋三郎「プラントハンター」)

言語表現を主名詞とする内容補充節は、ほとんどの場合「という」(あるいは「との」)の介

在を必要とするため、それに「ような」が加わると「XというようなY」となる。ただし主名詞が「話」の場合、(24) のように「という」が介在しないこともある。

上記のような言語表現に関わる名詞の他に、「こと」が主名詞である場合もある。その場合、主節の述語が「言う」「書く」など言語に関わる動作を表す動詞となる。

(28) もしかしたら来るかもしれないようなことを言ってたでしょ。

(沢木耕太郎「一瞬の夏」)

(29) 筆者が昔読んだ詐欺の手口を書いた本に、「一流の詐欺師は、日頃は正直で小さな嘘はつかない、周囲に信頼されるような人だ。彼は本当に必要なときに備えて、信頼を蓄積している…」というようなことが書いてあったのを思い出す。

(朝日新聞)

6. 例示

6-1 「例示」とは

ここでは「XようなY」の例示用法について述べる。例示の定義については、従来の見解に従い、「ある事物が他の事物に関する一例であるような関係」とする。「X（節）ようなY」の場合、Yの例を、名詞でなく節であるXで示すことになるが、名詞修飾表現が置かれる文脈、Xの内容といった要素によって、以下に示す3種類のものが認められる。

6-2 具体例を示すもの

文脈中で、あるものについて、具体例を示す必要がある場合に、「XようなY」という名詞修飾表現を用いることがある。

(30) (31) (33) のように、あり得る具体例のうちの一つだけを挙げている場合もあれば、(32) (33) のように複数の例を並置している場合もある。

[内容補充による修飾]

(30) 当時の科学は必ずしも成績の順に合否がきまるのではなく、推薦者の発言が大きく物を言い、ばあいによっては（たとえば皇族が推薦者であるようなばあい）試験が行われる前から一番になる者がきまっていたりするので、(略) (高島俊男「李白と杜甫」)

(31) どうも最近の日本人そのものが悪く変わってしまったと、私には思えて仕方ありません。親は豪華な車に乗っているのに、子どもの給食費を払わないというようなことです。権利は主張しますが、義務は果そうとはしません。人にしてあげるより、やってもらふことばかり期待します。

(読売新聞)

(32) 絹子が妊娠したことを知った修一は、彼女を殴る、蹴る、踏みつける、階段から引きずり降ろす、というような乱暴を働いた。 (片岡義男「映画の中の昭和 30 年代」)

[関連事態による修飾]

(33) 人生の楽しみには、いろんなものがある。酒、女、賭け事、なども楽しみには違いないが、いささか単純だ。/ 悪口、貯金、浪費などというものもある。／最近の若い男の

- 子たちにとっては、お洒落も重要な楽しみのひとつらしい。一流新聞の誤植をさがす事に、生きがいを感じているような男もいる。⁷⁾ (五木寛之「風に吹かれて」)
- (34) 一方、子供がまだ小さく、これから教育費の負担が重くなるような家庭や、収入の見通しについて少なからず不安を感じているような人の場合には、ローンの金利上昇が家計に与える影響は大きくなる… (朝日新聞)

6-3 参照先の情報を示すもの

Xが、Yの表すものの参照先を示すという形での例示である。修飾節Xは、主名詞Yの表すものの在りか、すなわち出現や存在の場についての情報を示す。具体的には、Xは「〈ある場／媒体／時（時代、時点）等〉にある／出てくる／見られる」、「〈ある人物（話し手自身の場合もある）〉が 言った／見せた／行った／体験した／思った／考えた」などといった表現をとる。

修飾節Xの中の述語と、主名詞Yとの間に格関係が見出せるこの表現は、関連事態による修飾のうちの、(3) ①のものである。

- (35) [健康相談での「じんましんが出たが、妊娠・出産したことと関係があるのだろうか」という質問に対する回答] ご質問にあるような妊娠や出産は、コリン性じんましんの発症とは関係がないと思われます。 (朝日新聞)
- (36) [オフィスに関する不満を述べた文章の一節] ドラマに出てくるようなついたて付きデスクが羨ましい。 (読売新聞)

Xに示されるYの参照先に関する情報には、二種類のものがある。一つは、Xが特定の・個別の時空について言及しており、それが聞き手にも示されており、即時参照が可能なものである。具体的には、「過去に提示された」、「今すぐにでも参照可能である」、「この直後に提示される」といった内容である⁸⁾。上掲(35)や、次の例がこれに相当する。

- (37) (彼は) 欄間のところまで引いてあった琴糸をひっぱって来て、そこでいま私が実験してお眼にかけたような方法で自殺した。 (「横溝正史自選集1」)
- (38) 彼はかすかに眉をひそめた。それから、梅子の家で見たような、唇を噛んだどこか複雑な面持ちで、ゆっくりと踵を返した。 (夏樹静子「夏樹静子のゴールデン12」)
- もう一つは、Xが示すYの参照先が、特定の・個別の時空にとどまらないものである。(36)や、次のような例が相当する。

- (39) 落語に出てくる人物のうちで、いちばん誤解されやすいのが幫間、太鼓持ちであろう。(略)／しかし、本物の幫間はそんなものではなかったのである。(略)したがって落語に出てくるような幫間では、とうてい務まらないことを知っておいてほしい。 (川戸貞吉「落語大百科」3)

- (40) [紀行文の一節] 川の方に目をやると、カルガモの親子5羽がすいすい水をかき、コイかフナだと思えますが、大きな魚も泳いでいました。大府には、童謡に出てくるような自然がまだ残っているんですね。 (読売新聞)

- (35) (37) (38) のような例では、Xはあくまで参照先を述べるにとどまり、Yの具体的な

内容は、その参照先にあたってはじめてわかる。一方 (36) (39) (40) の例の場合、Xの中で言及される、ドラマや落語や童謡についての知識やイメージがあれば、問題になっているYがどのようなもの（どのような机や幫間や自然）であるのかが、ある程度理解できる。これらについては、Yがどのようなところに現れるか、Yをどのようなところで見出せるかを修飾節Xに示すことが、Yの内容や特徴を想起するために役立つ情報となっているという面があると言える。

6-4 属性を表すための例を示すもの

ある人物や事物の持つ属性や特徴を具体的に表す例として、「XようなY」という名詞修飾表現が用いられる場合がある。

(41) 留五郎は表から入ってくるのに首を縮めるような背の高い男で、…

(「松本清張全集」24)

(42) 父は道に落ちた大根の葉を食べ、捨てられた茶わんを使うような人で、「もったいない。

ものを粗末に扱うと、人間同士が粗末にしあうようになる」が口癖でした。(朝日新聞)

例 (41) ならば、「留五郎」の持つ「背が高い」という属性を具体的に表す例として「(留五郎が) 表から入ってくるのに首を縮める」という事態が示されている。(42) では、「父」の持つ属性を具体的に表す例として「(父が) 道に落ちた大根の葉を食べ、捨てられた茶わんを使う」という事態が示されている。

上の例のように、文脈においてある特定の人物なり事物なりが話題とされており、その人物や事物が持つ何らかの属性を、話し手が問題としようとしている場合が多い。

問題となる属性は、(41) のように文中に明示されている場合と、(42) のように明示されていない場合とがある。

6-4-1 属性が明示されている場合

問題となる属性は、名詞Yとして表されている ((43) の「けちんぼう」) か、節XのほかにYを修飾する語として明示されている ((44) の「背の高い」、(45) の「細い」、(46) の「美しい」) か、あるいは文脈中に示されている ((47) ~ (50)、波下線部)。

(43) でもクグは宝を1人で楽しむようなけちんぼうではありませんでした。(毎日新聞)

(44) (再掲 = 41) 留五郎は表から入ってくるのに首を縮めるような背の高い男で、…

(45) 逃げたところは、大きな桶や樽や甕が無数に伏せられている庭であった。大人なら通りかねるような細い空間が出来ている。(山田風太郎「忍法剣士伝」)

(46) いま眼のまえにいるひとは、都会でだってそうざらにはお眼にかかれないような美しいひとだった。(横溝正史「八つ墓村」)

(47) 彼はただ威張りたかつただけだ。／何しろ変な具合に威張りちらすので有名な人で、たしか司馬遼太郎の『坂の上の雲』を批評して、日露戦争のアフリカに与へた影響を書いていないのが欠点、と論じるやうな人物だった。(丸谷オー「月とメロン」)

(48) (彼女は) お世辞にも育ちはよくない。銀杏返しに髪を結び、ほおずきをいつも口に含

- んで鳴らしているような女だった。(関川夏央「二葉亭四迷の明治四十一年」)
- (49) その他、用いられている言葉の下品なことは驚くどころの騒ぎではなく、ちょっとここで文字にするのもはずかしいような台詞を平気でしゃべらせている。
(双葉十三郎「日本映画批判」)
- (50) ぼくの父親は海が好きだった。それも並大抵の好きではなく、ぼくが生まれるまでは、ダイビングのために日本中のきれいな海を求めて旅するような男だった。
(web 本の雑誌)

6-4-2 属性が明示されていない場合

Xは、Yの持つ属性で話し手が問題としたいものを表す端的・象徴的な例である。問題になっている属性は文中に明示されておらず、聞き手はそれをXから読み取ることになる。

たとえば例(51)では、X「仕事を放り出す」から、「いい加減な」「責任感に欠ける」「信用できない」といった属性を読み取ることができる。

- (51) 「出馬すると番組をキャンセルすることになる。仕事を放り出すような人間が行政のトップに立てるわけではない」
(朝日新聞)
- (52) (再掲 = 42) 父は道に落ちた大根の葉を食べ、捨てられた茶わんを使うような人で、「もったいない。ものを粗末に扱うと、人間同士が粗末にしあうようになる」が口癖でした。
(朝日新聞)
- (53) 「小津先生はスマートで洒落者。清水オヤジはデブプリしてキンカン頭で、夏場は『涼しいから』と、ランニングと半ズボンでいるような人です。」
(川本三郎「今ひとたびの戦後日本映画」)
- (54) 15年間使っていたコタツを捨てたのは、夏でもコタツをちゃぶ台代わりに使うような女の部屋に男が寄りつくわけがない、と妹に言われたから
(朝日新聞)
- (55) 独歩と佐々城信子は(略)知り合って五ヵ月後に結婚した。(略)しかし、フランクリンの少年用伝記を一冊書いてようやく十円を手にするような生活に上流育ちの信子が耐えられるわけもなかった。
(関川夏央「二葉亭四迷の明治四十一年」)
- (56) 時には薬にさえ事欠き芋粥で何日も過ごすような暮しをしながら、家内に陰惨な貧しさの影が見えないのは…
(有吉佐和子「華岡青洲の妻」)

6-4でここまで挙げてきた例はいずれも、関連事態による修飾のうちの(3)①に当たる⁹⁾。実例ではこの類、殊に人物についての例が多い。次に示すような、内容補充による修飾の例は少ないようである。

- (57) [書評の一節] 作者の用意してくれた鮮やかなラインを追っていくだけでも楽しいが、ここに、読者自身にも思考実験を課すような、人を食ったところがあれば、さらに刺激的だったと思う。
(朝日新聞)

7. 目的

先に(3)②「修飾節の事態に付随するものを主名詞とするもの」に示した「b. 主名詞が指

すものが、修飾節の事態の成立・実現に関わるものである表現」の中に、「方法」「手段」「工夫」「仕組み」「助け」「手伝い」といった類の名詞を主名詞とし、それらが関与して成立・実現する事態を修飾節に示す表現がある。たとえば「働かないで金を得る方法」「ライバルに勝つ手段」「点数を伸ばす工夫」「宝石を現金に換える手伝い」といった表現である。

この類型の名詞修飾表現で、「ような」が介在するものがある。

(58) 新代表がすみやかに選出されるような手段をとるべきだ。 (朝日新聞)

(59) ファイルやフォルダが散らないような仕組みなどが取り入れられ (朝日新聞)

(60) もし、小夜子の養育費として金を出していたとしたら、玉蟲伯爵はおそらくその金が、確実ににおこまの手に渡るような方法を講じ、また実際に小夜子の養育費として使用されているかどうか監視したにちがいない。 (「横溝正史自選集」5)

(61) 「『冬眠のクマ、今年は観察窓から覗けそう』という記事の一節」クマに刺激を与えないような工夫や見学者をどう制限するのかといった課題もあるが (略) (朝日新聞)

(62) 食べ物を選ぶときなど、身体に良いのは一体どちらかについて、自然に選ぶことができるようなコツを説く。 (朝日新聞)

Xは実現・成立すべき、あるいは実現を目指している事態、Yはそのための手段や方法の類を表す名詞修飾表現であるとも言える。このような「XようなY」の意味用法を、ここでは「目的」と呼ぶ。

8. 終わりに

以上、「ような」が介在する名詞修飾表現「XようなY」の意味用法の分類について示した。

副詞節「ように」との対応関係、また、「XというY」など他の形式が介在する名詞修飾表現との比較などの問題も残るが、これらについては稿を改めたい。

【注】

1) 後述する「概要」、「例示」のうちの「参照先の情報」、「目的」などである。

2) 「リアリティー」とは、「述べられている事態」と「現実」との「事実関係」と定義される。

リアリティー	仮定的	仮説的 …… 事実であるかどうか未定
		反事実的 …… 事実と反している
	事実的	…………… 事実と一致している

(安田 1996 p.67)

リアリティーと〈様態〉〈比喩〉〈内容の名付け〉との関係は次のようにまとめられる、とされている。

リアリティー		用 法
仮定的	仮説的	様態
	反事実的	比喩
事実的		内容の名付け

(安田 1996 p.67)

3) 安田 (1996) (1997) では、連体修飾構造について、「内の関係」・「外の関係」の二分類を用いている。

4) 寺村 (1975) 等が「内の関係」とするものは本稿の「関連事態による修飾」の①に相当し、「外の関係」とするものの一部は「内容補充による修飾」に相当し、そのほかの「外の関係」のは「関連事態による修飾」の②や③に相当する。詳しくは、高橋 (2006) を参照されたい。

- 5) 寺村 (1975) などにおける「内の関係」、すなわち主名詞が表すものと修飾節中の述語との間に格関係が見出せるような名詞修飾表現はここに分類される。
- 6) 「予想」「予測」「感じ」「気(がする)」などをYとする表現については、これらの名詞の意味的特徴からいって、その内容を説明する節Xに描かれる事態が現実・事実であるかが不確か・不明であることはきまっており、「ような」が介在する必要性はない、と見る向きもあるかもしれない。確かにこれらの場合「ような」は必須ではないが、「ような」があることが自然である。「記憶」の場合は、「ような」の有無により解釈に違いがある。次の例では、(11) とは異なり、Xが現実・事実であると、話し手は見なしていると解釈できる。
- ・ 私も小学五年生のとき、『ファープル昆虫記』を夢中になって読んだ記憶がある。(大谷剛「昆虫」)
- 7) 話し手が「男」を観察して「この男は一流新聞の誤植をさがす事に生きがいを感じている」という印象を得た、と解釈すればこの例は「印象」の用法ということになる。しかし、このテキストが「人生の楽しみ」のいろいろな例を挙げている文脈であり、この表現もその一つとして示されていると捉えて、「例示」用法とした。
- 8) この「XようなY」は、「以上のような」「以下のような」「次のような」「図のような」「前述のような」、「昔、以前」のような」といった名詞修飾表現に通じるものがあると思われる。
- 9) (55) (56) の主名詞と修飾節の関係については「〈その〉生活 {において／の中で}、フランクリンの少年用伝記を一冊書いてようやく十円を手にする」、「〈その〉暮らし {において／の中で}、時には薬にさえ事欠き芋粥で何日も過ごす」という関係が想定できると捉え、(3) ①と見なす。

【参考文献】

- 井上優 (1993) 「日本語の『ぼかし表現』をめぐって－文法論からのアプローチ－」『日本学研究』3 北京日本学研究中心
- グループ・ジャマシィ (1998) 『日本語文型辞典』くろしお出版
- 国立国語研究所 (1951) 『現代語の助詞・助動詞－用法と実例－』秀英出版
- 高橋美奈子 (2006) 「節による名詞修飾表現の分類の一試案」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平 3 複文・談話編』くろしお出版
- 寺村秀夫 (1975～1978) 「連体修飾のシンタクスと意味－その1－～その4－」『日本語・日本文化』4～7号 大阪外国語大学留学生別科 (寺村 (1992) 『寺村秀夫論文集I』くろしお出版に再録)
- 前田直子 (2006) 『「ように」の意味・用法』笠間書院
- 益岡隆志 (2002) 「第2章 複文各論」野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則『日本語の文法4 複文と談話』岩波書店
- 森山卓郎 (1995) 「推量・比喩比況・例示－「よう／みたい」の多義性をめぐって－」『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』明治書院
- 安田芳子 (1996) 「連体修飾形式「ような」の意味・機能－V ような N の場合－」『神田外語大学紀要』2
- (1997) 「連体修飾形式「ような」における〈例示〉の意味の現れ」『日本語教育』92号 日本語教育学会